

第 7 回研究会における主な意見

3 障害者の派遣労働について

(論点 1) 障害者の派遣労働の位置づけ及び評価について

- 派遣を含めた様々な雇用形態が障害者の雇用促進にプラスになる面もあるが、マイナス面をどうやって克服するかを注意しつつ、他の雇用形態や業種と同レベルで派遣分野での障害者雇用の促進、特に雇用率の問題を考えてはどうか。(岩村座長)
- 派遣元事業主と派遣先の共同連携が一般の場合でも大事だが、より障害者の場合は強く求められる。(北浦委員)
- 派遣元事業主と派遣先で、障害者をどのようにサポートしていくか、支援団体との関係性の整理をしていく必要がある。(八木原委員)
- 派遣会社に聞くと、知的障害者、精神障害者の派遣は難しいと考えている。派遣会社側の障害者に対する認識を変えてもらう必要性を感じている。(片岡委員)
- 労働元が労働力需給調整、特にマッチング機能に着目するとすれば、福祉的就労から一般雇用へ、一般雇用から福祉的就労への架け橋、特に福祉的就労から一般雇用へという流れの中でポジティブに位置づけていくということをコンセンサスにすべきではないか。(輪島委員)
- 雇用機会の拡大という点では派遣は意味があるが、その働き方に満足できるかの視点が非常に重要なのではないか。正社員を目指すという方もいるので、機会を与えるというだけでなく、その先の支援も考えておく必要がある。(北浦委員)

(論点 2) 派遣元事業主と派遣先の役割分担について

- 労働者である障害者についての個人情報をごとまで把握し、伝えるかという問題がある。派遣元事業主と派遣先との間の情報のシステム化をしないと難しいのではないか。(松友委員)
- 雇用から福祉的就労への移行の際、知的障害者や精神障害者に対して、就労支援機関が関わるのは必須である。その中で就業・生活支援センターの趣旨に基づき、生活面から精神的な面でのサポートが必須である。(宮武委員)
- 専門家の調査研究になると思うが、実際に派遣スタッフとして派遣するときに必要な支援と、派遣先の配慮すべき事項のマニュアルのようなものがないと難しいのではないか。(輪島委員)

- 派遣元事業主、派遣先の分担関係をどう整理するかということと同時に、一般の派遣とは異なり、場合によっては第三者支援というものを考えていく必要があるのではないか。(北浦委員)
- 専門的な知識をむしろ障害者雇用や福祉的な支援をしている人たちやジョブコーチのノウハウを、自ら派遣元事業主が培い、需給調整機能として派遣先の方へ障害者の雇用が、紹介予定派遣やトライアル雇用を使って、ルートとして流していけるような仕組みにできないか。(輪島委員)
- 派遣元事業主と就労支援機関との間でネットワークを構築し、職務分析や切り出しの面で連携を強めていくことで、派遣という形で、まず民間の需給調整を使いながら、派遣という形で就労に結びつけていくことができれば、一般就労への移行という展望も開けるのではないか。(岩村座長)

(論点3) 派遣先への支援施策の必要性について

- 障害者の派遣を受け入れるのは、企業にとってのメリットは雇用率に反映されない限り、はっきり言ってないと思う。(齊藤委員)
- 例えば、6ヶ月派遣契約で、施設まで直すかということにはならないと思う。一方で、設備や人的支援についての助成ないし支援策というのは、環境整備ということで必要なのではないか。(輪島委員)
- 複数の派遣先がある場合は、ジョブコーチが派遣元事業主にいて、巡回的に派遣先を回るというイメージも描けるが、その場合派遣元事業主に助成等をつけてジョブコーチを委嘱するという方が実態にはかなっているのではないか。(岩村座長)
- 職場でのトラブル発生の際、家族や関係者が絡んできたときの調整機能が支援として一番必要なのではないか。(松友委員)
- 知的障害者や精神障害者の雇用の場合、権利擁護の観点が重要になる。中には職場での人権侵害や権利侵害の事例もある。そういう意味でも就業・生活支援センター等の公的な部分での関わりが必要ではないか。(宮武委員)
- 障害者の派遣については期間制限がないということにして、設備や施設についてもできるとしたときに、そのようなことが障害者雇用促進法の中で、技術的に可能なのか。(輪島委員)
- 障害者の場合、非常に若い時から派遣という形になる可能性もあり、期間制限がないということをして立法政策として考えたときに適切かどうかというのは、慎重に考える必要がある。(岩村座長)

(論点4) 労働者派遣事業にかかる障害者雇用率制度の適用について

- なぜ雇用率という考え方を入れるのかということがあるので、派遣先とい

うものを実際に働くということによって、少なくとも雇用率との関係では、雇用と同視できるような関係があるというような理屈を考えるということがあるのではないか。（岩村座長）